



昭和六十二年九月某日、突如、乙字ヶ滝石切場に巨大な卵が出現したとマスコミによって報道された。奇しくも、この地は昭和四十一年八月、考古学に魅了された少年佐藤重寿（当時岩農校二年生）によって約二万年前の旧石器が発見されたロマンの地である。

この巨大な卵は須賀川青年会議所会員らによって、須賀川をゴジラの里にしようという発想のもとに仕掛けられたものであった。また、十月七日の鎮守秋祭りの夜行われた御輿パレード

## 須賀川の人物史 ①

ゴジラやウルトラマンの生みの親

つづら や えい  
円谷 英 一（一九〇一〜一九七〇）

宝系映画館のスクリーンであった。

ここでゴジラの生みの親の登場である。それは、世界の映画界から特撮の神様といわれた円谷英二であった。

円谷英二（本名英一）は明治三十四年七月十日、中町の糶屋大東屋の長男として生まれ、幼くして母に死別した英一は祖母に養育された。少年のころから

▲乙字ヶ滝のすぐそばに出現した話題の巨大「ゴジラの卵」



ゴジラに演出中の円谷英二特撮監督

る。前述のゴジラは五十五歳のときの作品である。その後、各種の怪獣シリーズ映画を製作したが、昭和三十年代後半、特に東京オリンピックを契機にテレ

ビが普及した。ここに現れたのが「ウルトラQ」シリーズであった。この当時生まれ、育った子供たちは、テレビにくぎ付けされたように見入ったのであった。これらの映画やテレビを見ながら育った人たちが今、中堅となつて、ゴジラの卵を仕掛けたりしながら、町の活性化をはからうと働いているのである。昭和四十五年一月二十五日、気管支喘息に伴う狭心症の発作で六十八歳の生涯を閉じた。市博物館にはウルトラシリーズで使われた怪獣シユガロが展示されている。（永山祐三）

飛行機に興味をもち十六歳で上京就職したが半年で退社して、彼のあこがれの的であった日本飛行学校に入学。その後、神田電気学校で勉強。十八歳のとき日本天然色活動に入社して映画製作の第一歩を踏み出した。三十六歳のとき東宝に特殊技術課が創設され、以後、特撮映画を次々とスクリーンに送り出した。特に、「ハワイ、マレー沖海戦」は映画界に初めて特技の必要性を認識させた代表作の一つであ



永山祐三さん

「須賀川はすぐれた自然環境に恵まれ、古くから城下町、商人の町として栄え、文人墨客の交流も頻繁に行われていました。その精神は現在も連綿と受け継がれており、数多くの人物を生み育ててきました。本市の歴史と伝統文化を築き上げてきた先覚者のその生涯を知ることが、本市の過去と現在を知ることであり、執筆に力が入ります」と、永山さんは語っております。どうぞご期待下さい。

\* 今月号から「ふるさと再発見」の一つとして、本市が生んだあるいは本市にゆかりのある人物を取り上げ、その業績や生涯、人となりを紹介する「須賀川の人物史」をシリーズで掲載します。執筆者は、北町の永山祐三さん（五三）です。永山さんは浴場経営の傍ら、市文化財保護審議会委員として活躍、さらに須賀川市史や水道五十年史など数多くの郷土史編纂さんに携わっている郷土史研究者でもあります。



牡丹園内にある柳沼源太郎翁像



## 須賀川の人物史 ②

### 柳沼源太郎 (一八七五—一九三七)

ぼたぼたと肥くむ朝の牡丹哉

この句の作者は柳沼牡丹園の園主であった、柳沼源太郎である。彼は俳号を破籠子(はくろうし)といひ、原石鼎(せきとう)に師事。矢部樽郎(やぶすんろう)、道山草太郎(みちやんそうたろう)と共に桔槔吟社(きかうごんしゃ)を創立した俳人であった。彼は、牡丹の開花期に訪れる観客に満足のゆく見事な花を見せるには、四季を通しての手入れしかないと言ふ。冬に心を入れ、寒肥(かみえ)は大事な仕事であった。七十年前、彼に師事し俳句の手ほどきを受けた水野武平(みづのたけへい)は「冬になると源太郎さんは作男たちと一緒に振桶(ふるおけ)で下肥(しもえ)を担ぎ、牡丹の根元

に穴を堀って寒肥をやっていた」と当時を思い出して話してくれた。

源太郎は、明治八年七月六日、中町の商家「糸八木屋」の長男として生まれたが、柳沼家では明治初年伊藤家の薬種用の牡丹畑を譲り受けて、観賞用の牡丹園として整備にかかっていた。

彼は牡丹園を計画どおりの軌道に乗せるには専門的に農業の勉強をしなければならぬと、十五歳のときに上京。開成中学を経て東京農科大学に学んだ。帰郷後は家業の糸八木屋を弟に任せて、牡丹園に入り、牡丹と共に寝起きし、牡丹の下僕(しもべ)となつて栽培一筋に尽くしたのである。

園主より身は芽牡丹(めぼたん)の奴(やつ)かな  
破 籠子(はくろうし)

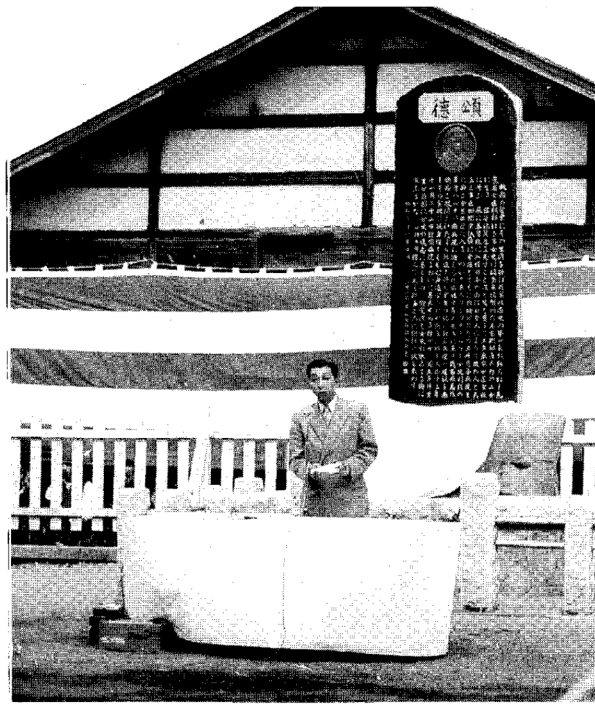
このようにして牡丹と共に一

生を送つたのである。今なお、彼の功績としてたたえられているものは、江戸時代から伝えられて来た薬種用の牡丹畑の地割をそのまま生かしての牡丹園の整備であった。

昭和七年、柳沼牡丹園は、その功績を認められ、文部省から「名勝」の指定を受け、名称も「名勝須賀川牡丹園」となった。

その後、第二次世界大戦による戦中、戦後の混乱期を迎え、牡丹園も例外ではなく苦境に立たされたが、柳沼一族が手を取りあつて難局を切り抜け、現在の牡丹園に引き継いだのである。彼は、現在の法人化されて整備された牡丹園のあるべき姿を予期しながら、この世を去つたのではないかと思われる。昭和十四年十二月二日没、六十二歳であった。

(永山祐三)



高松宮殿下御臨席のもとに行われた顕彰碑の除幕式

## 須賀川の人物史 ③

### 服部ケサ (二八八七〜一九二四)

公立岩瀬病院の正門を入った左側に女性のレリーフがはめ込まれた碑がある。この碑は、人が最も忌み嫌った病「癩」の患者救済事業に心血を注いだ女医、服部けさ子の顕彰碑で、昭和三十一年五月二十一日、服部けさ子女史顕彰会(会長 杉原文吾)によって建てられ、高松宮殿下

御臨席のもとに除幕式が行われた。

ケサ(俗称けさ子)は明治十七年七月十九日、東四丁目四番地(本町)の商家ランプ釜屋、服部直太郎の二女として生まれた。彼女には三人の姉妹がおり、姉のセツが家業を継いだ。兄の治(歌人)、妹のテイ(作家、水野仙子)は近代文学史上に、その名を残しケサと共に服部三兄妹として今日に語り継が

れている。

ケサも少女のころから文学を志したが、家族が病気になる、その苦しむ姿を見ながら看護にあたったのがきっかけとなって医学の道を選び、東京女子医学専門学校(現東京女子医大)に入学。大正三年(二十七歳)、医師試験に合格したが看護婦として三井慈善病院に就職。勤務中に癩患者に接した彼女は、ここで自分の一生を癩患者救済のた

めに捧げる決心をし、その後、癩治療について府立全生病院長、光田健輔の指導を受けて修得した。大正六年、癩患者の救済と伝導がイギリス人コンウオル・リ

馬草津温泉に医師として赴任し、聖バルナバ病院を開設した。当時、日本の救癩事業は外人の手にゆだねられていることを知った彼女は「日本の癩患者の救済は日本人の手で」との決意

のもとに、志を同じくする川上チヨと共に、大正十三年十月一日、日本人として最初の癩専門の鈴蘭病院を草津栗生村に開業する。しかし、患者への献身的な貢献と病院建設で心身共に疲

れ果てたケサは、開院二十三日めの大正十三年十一月二十二日午後七時三十分、心臓麻痺で四十歳という若さでこの世を去った。

彼女が医専在学中に洗礼を受けた信仰の厚いキリスト教信者で、「人その友のために生命を捨てる、これより大なる愛はない」という彼女の言葉は清純な生涯そのものであった。

(永山祐三)

須賀川市では、昭和三十七年八月、多目的に活用できる施設として、市体育館を建設した。その舞台に設置した緞帳は「ぼたんの町須賀川」にふさわしい図柄で、古木に緋牡丹が咲き競う絢爛豪華な西陣織である。市体育館の緞帳の原画「写真」の製作者は、日本美術院同人で、



須田中画伯

## 須賀川の人物史

④

### 須田善二(中) 一九〇七—一九六四

東京芸術大学美術学部教授の須田中画伯である。彼は本名を善二といい、明治四十年一月二十一日、東一丁目三十七番地(南町)、通称三丁目の雑貨商、須田善太郎の三男として生まれた。当時の三丁目には奥州街道須賀川の南の商店街として鏡石、矢吹などの近郷近在からの買い物客で繁盛してい

た地域であった。大正十一年、須賀川町立商業学校を卒業した彼は、画家としての志を立て、私立石川中学校四年に編入。二年間勉学に励み昭和二年、東京美術学校本科日本画科に入学した。

この出来事が生涯、画家として歩く道への出発点であったという。昭和七年十月、第十三回帝展で「白河の夏」が初入選した。このときは前述の学則違反のこととがあり、出品許可をあきらめていたが、八月に入ってから突然許可が下り、たまたま帰省途中白河城跡に立ち寄り、城壁に立つて思い巡らせ感じるところがあつて画材として選び「決死の覚悟」で製作したという。在学中は松岡映丘に学び、帝展に連続入選。昭和九年卒業した。彼の作風も始めは古典的であつたが、前田青邨に師事し、昭和二十七年、日本美術院展に出品するようになってから近代的表现の可能性深求に向かう。三十七年院展出品作「吹雪」はその深求のひとつの結果であるといわれている。

院展での主な受賞は大観賞四回、院次賞四回、白寿賞五回を受賞し昭和三十五年同人に推荐された。昭和二十六年、母校の東京芸大美術学部任教官として迎えられた。学生に教えることによつて自身の画業の進歩を図りつつ、新しい日本画の表現によつて絵画を語らせようと試みながら優れた作品を製作して将来を嘱望されていたが、昭和三十九年七月十日午前四時心筋硬塞のため「中芸術」の完成をみることなく五十七歳で急逝した。残された多くの作品は、須賀川市立博物館や各地の公立美術館、コレクターなどに愛蔵されている。また、母校の県立須賀川高等学校では彼の業績をたたえ、須田中賞を設定、卒業生の中から文化活動に優れた者に授与している。

(永山祐三)

# 須賀川の人物史

⑤

## 市原多代女（二七六〜一八六五）

じつとして昇る日を待つ牡  
丹哉  
あぶなしと見るまで開く牡

丹かな  
夕かげにくくりはじめるば  
たん哉



多代女作牡丹の句入り美人画（芳虎筆）

ひとひらに嬉しがる子やち  
る牡丹

この俳句は、江戸時代末期  
の女流俳人を代表する市原多  
代女が、牡丹の一日の生態を  
詠んだものである。

多代女は、安永五年（一七  
七六）市原本家七代寿綱の四  
男三女の末娘として生まれた。  
市原家は酒造業を営むかたわ  
ら、道場町（現在の宮先町の  
一部と池上町）大庄屋の職に  
あつて町会所活動の中心とな  
つて活躍していた。彼女が十  
七歳のときに分家（縮緬問屋）  
綱忠（多代女の兄）が若くし  
て没し、跡継ぎがなかったの  
で養女として入り、十九歳のと  
き会津若松から松崎常蔵（有  
綱）を迎えて二男一女をもう  
けた。

彼女が三十一歳のとき、夫

が病死し、その後、三人の子  
供（ゆう十一歳、寿棋八歳、  
綱雄一歳）を抱えての家業と  
家事による心労から神経症と  
なった。

このことを心配した長兄の  
綱綱（狂歌、号・峯巒亭酒屋  
蔵人）は、近所の豪商で俳人  
の石井雨考（久右エ門）に相  
談して、俳諧の道に入ること  
を勧めた。

雨考は、仙台出身の江戸の  
医者で俳壇の大立物であった  
鈴木道彦を紹介した。彼女は  
道彦に師事し、心機一転して  
明るい生活を送り、生涯を俳  
諧の道一途に懸けたのである。  
文化十一年（一八一四）、  
雨考は「青陰集」を刊行した。  
その序文を多代女に依頼した。  
これは、俳壇における彼女の  
地位が確立されつつあること

を認められたからであろう。  
芭蕉を尊敬していた彼女は、  
作句のかたわら芭蕉の作品を  
研究して自分の立場を守り、  
誠実で具体的に句を詠んだと  
いわれる。

また、芭蕉崇拜の表れとし  
て、八十歳のとき芭蕉ゆかり  
の地、十念寺に田植唄の句碑  
を建立した。

家業・家事・俳句と一人何  
役をもこなした波乱にとんだ一  
生を送った彼女は、俳句集、  
俳句刷（一枚物）、俳諧の連  
歌、揮毫した幅、短冊などに  
約四千句の作品を残し、特に、  
「水かさに車はげしや藤の花」  
の句は、大正から昭和にかけ  
ての小学校唱歌に取りあげら  
れている。慶応元年（一八六  
五）八月四日永眠した。九十  
歳であった。（永山祐三）

# 須賀川の人物史

⑥

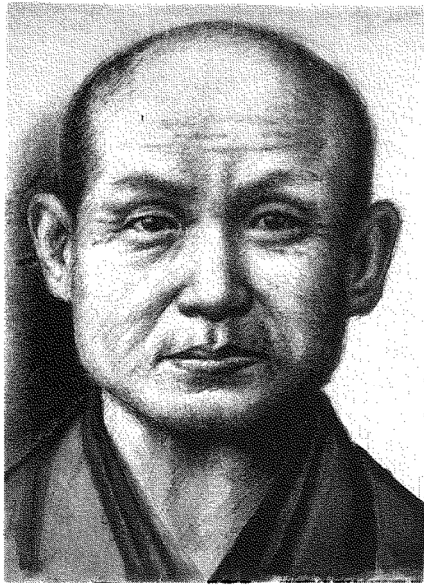
小林久敬こばやしひさたか（一八二二—一八九二）

「小林久敬翁

翁は文政四年須賀川に生まれ代々問屋業をしていたが、当時郡山は水の便が悪く安積三万石の収穫しかなかつたので、猪苗代湖から水を引くために全財産を投げうって寝食

を忘れ、これの成功に全力を注いだ。その後明治政府を動かして現在の安積疎水をひいて、大郡山発展の基礎をつくった先覚者である。郡山市観光協会」

これは、郡山市荒池の畔、



小林久敬翁の肖像画

愛宕神社境内に建てられている小林久敬頌徳碑の案内板の説明である。

久敬は、須賀川中町問屋で町役人を務めていた小林久長の次男として生まれた。彼は明朗活達で一途な性格であったといわれている。職業柄父親に連れられて旅をしており、六歳の時、初めて猪苗代湖を目にした。この時の印象が脳裏に焼き付き、彼の一生を湖水の水から切り離すことができなくなつたのであろう。

「湖水の水は必ず岩瀬、安積平野から須賀川まで引くことができる」と確信して、須賀川の豪商や有力者に協力を呼びかけたが「途方もないことを言う、気遣いだ」と、いわれて見離された。だが彼は、挫けることなく各地の人々を説得して歩き、安積地方の人から賛同を得て国や県に陳情した。

ところが、時は明治となり、政府と県では、安積と岩瀬地方に入植した開拓士族の授産事業として第一回国債を発行、国の政策によって明治十二年安積疎水の開削を決定した。国では、オランダから招聘した技師、フランドールンに工事の監督一切をゆだねて、四年間の短期間で完成させた。この間、久敬も現場に行き助言をしたが取り入れられな

かつた。しかし、通水式に水門が開かれ湖水の水が安積平野に流れついた時には、彼が三十数年間私財を費して民間人としてできるだけのことをして来た念願が、形がどうであれ叶えられたのであった。彼の功績も民間功労者として、明治天皇から銀杯を賜り、新宿御苑の観菊の宴に招かれその労をねぎらわれた。

若い時から妻子と別れて生活していた久敬は、晩年病気がちとなり不自由な生活を送っていたが、福祉事業の先覚者、郡山如法寺住職の鈴木信教（一八四二—一八九二）に賓客として迎えられ、明治二十五年五月二十一日、客殿において七十一年の破乱に富んだ一生を終えた。

（永山祐三）

# 須賀川の人物史

⑦

昭和二十八年十二月、須賀川町長の岡部宗城は、西袋、浜田両村と須賀川町の合併は「近村にお互いにつながるのがある町民各位の隣人愛こそ最もこれを推進する大いなる力であります」と回覧板で町民に市制促進の協力を呼びかけ、昭和二十九年四月一日官民一体による「須賀川市」が誕生した。

市制施行後、初代須賀川市長に当選した宗城は、その後近隣町村との合併推進（仁

## 初代市長

## 岡部宗城

須賀川市では、その功勞に



対し市葬をもって報いた。

宗城は、明治十四年六月二十五日、大町で勝誓寺住職、岡部霊城の長男として生まれた。幼名を玄龍といい、後に宗城と改めた。彼は、本山の西本願寺で得度し、明治四十二年には布教使として宗門のために活躍した。昭和五年、東京教区管事、築地本願寺輪番（輪番とは会社組織での支

した。

この間、昭和十四年九月から昭和二十二年四月まで福島県議會議員として、その職にあった。昭和二十六年、帰山していた彼は、須賀川町長に当選、戦後混乱期の町政を担当して現在の須賀川市の基礎をつくったのである。

宗城は、政治家としての功績は衆知のことであるが、俳人として文化人としての足跡をみてみよう。

彼は、明治三十五年（二十一歳）帰省中に、浦和から須賀川に転居して来た作家で俳人の矢田挿雲から俳句の指導を受け、スミレ会を結成して、俳号を句童とつけた。その後、渡辺光徳、岡部卓堂（宗城弟）ら六人で、乙夜会を創立、句集を発行して普及に努めた。

明治三十九年、河東碧梧桐が東北行脚の途中、勝誓寺に一泊、句童庵で句会を催した。等躬が三巻と軒の栗二升芙蓉咲いて下図なりけり垂碧梧桐 欧堂

その後、乙夜会に矢部椿郎らも参加、郡山群峰吟社、笹鳴吟社（久米正雄、安中俳句会）などと交流し、中央俳壇との交渉も多くなり、大正七年、原石鼎を迎えて桔槔吟社を創立した同人の一人である。このため、乙夜会も十一月に最後の句集を出して解放した。いわば今日の須賀川俳壇の礎となったのである。

また、戦争中には東京から多くの知人を須賀川に疎開させて世話をした。その中で、中央公論社長、麻田駒之助（俳号椎花）は戦後、東京に戻るときに世話になったお札にとコレクシヨンの中から、国重要美術品認定の「釈迦如来十六羅漢図三幅対」を須賀川町に置き土産として寄贈した。この幅物は現在市立博物館に収蔵されている。

先日まで市立博物館で開催されていた「須賀川ゆかりの俳人展」に

元朝や孫が導師の正信偈が展示されていた、これは現住、玄師を詠んだ句といわれる。

（永山祐三）



名誉市民に推薦された坂本氏(50年9月15日)

昭和五十一年春、第一回「財

に一億円を寄付した。市では、

時の澤田三郎市長から坂本鉄

団法人坂本鉄藏育英会」奨学

生に選ばれた佐伯佳貞ら六人

は、向学の念を抱き志望校に

進み、現在は各職場の中堅と

なつて活躍している。その後、

奨学生は延べ四十八人となつ

た。現在は十一人に育英会か

ら学資金の一部として、毎月

四万円を給与している。

育英会の生みの親、坂本鉄

藏は、昭和五十年八月、須賀

川市内の成績優秀な高校生で、

経済的理由から進学を断念す

る者への一助にと、須賀川市

# 須賀川の人物史

⑧

## 名誉市民第1号の

## 坂本鉄藏

(一八九五—一九七六)

寄付金を基本財産として前述の育英会を設立した。また、彼は老人福祉事業に

も深い関心をもち数年にわた

つて敬老の日に祝いの品を贈

り感謝されていた。昭和五十

年七月には「広報」保存用綴

市立商業学校卒業後は家業を

と栄誉をたたえた。鉄藏は、明治二十八年十一

月二十日、西五丁目二番地(現

本町)青果商 坂本金三郎の

長男として生まれた。宇都宮

市立商業学校卒業後は家業を

表紙を各戸に配った。これらの

の功績に報いるため、市では

「須賀川市名誉市民」制度を

制定し、昭和五十年九月十二

日第一号名誉市民に推薦した。

九月十五日敬老会の席上、当

時の澤田三郎市長から坂本鉄

手伝う傍ら町の活性化を図る

ため、大正九年全町から二十

歳から三十歳の青年を会員と

して募り、須賀川実業青年会

を結成、会長に就任した。二

十五歳であった。それから三

年後、二十八歳のとき彼は、

須賀川を離れ東京都本郷にお

いて食料雑貨の店(現在のス

ーパーマーケット)を開店し

たが、昭和十年代に入り第一

次世界大戦の影響で経済界も

不況となり物価統制令がひか

れ、鉄藏も自営業からサラリ

ーマンとなった。昭和十五年

横浜市関東化学研究所に入社。

戦後、殖産住宅相互株式会社

入社、取締役として彼独自の

手腕を発揮、伊豆伊東市に大

規模な分譲別荘地を造成した。

これは、宅地分譲の先駆けと

なった事業であった。

また、彼は信仰の念厚く、郷

里の神社や寺院に多くの寄進

をしている。特に、神炊館神

社内陣に安置されている狗犬

一対は彫刻家・柳沼曹雲(日

展作家)に制作を依頼して奉

納した。この狗犬は文化遺産

として後世に伝えられるであ

ろう。

鉄藏は、自ら手掛けた伊東

市の別荘で、昭和五十一年十

一月三十日、八十一歳の生涯

を終えた。須賀川市では、そ

の功績に対し市葬をもって報

いた。

ちなみに長男の文男さんは

東京須賀川会長に推され、郷

土発展のため、郷里と東京の

パイプ役として尽力している。

(永山祐三)



風呂を出て夕べの巷、  
さわやかに 榎郎  
この俳句は、北町清水湯の  
庭にある俳人矢部榎郎の句碑  
である。

保太郎は、俳号を榎郎、書  
の雅号を蓬軒と号して、青年  
期から、その活躍はめざまし  
く全国の俳壇に名が知られて  
いた。

## 須賀川の人物史

⑨

俳諧一筋に生きた

矢部保太郎

(一八八一—一九六四)

彼が俳句の道に入ったきつ  
かけは、明治三十九年、教員  
として須賀川小学校に転任し  
たときに、岡部句童などが中  
心となって結成していた乙夜  
会であったという。

しかし、保太郎の祖母は市  
原多代女の孫であるところか  
ら、当然彼にも俳句の血が流  
れていたであろう。

保太郎は、明治十五年四月

四日、長沼町字金町七十四番  
地内イ号 矢部源次郎の長男  
として生まれた。矢部家は代  
代長沼藩士であったが、明治  
時代前期には酒造業を営んで  
いた。明治三十六年、福島県  
師範学校本科を卒業後、飯坂、  
白方、須賀川の各小学校教員  
を経て、大正六年、三十五歳  
で故郷の長沼小学校長となつ  
たが、大正九年四月、病気の

ため退職し、須賀川銀行に入  
社した。その後、自営の印刷  
業を開業したが、大東亜戦争  
による統制経済で印刷業界も  
統合された。昭和二十年一月  
一日、六十三歳で須賀川図書  
館長に迎えられた。

春寒や我には大きな事務机

二十二年公民館が設置され、  
初代館長を拝命(兼任)した。

昭和三十年五月、市図書館  
長を退職、以後八十三歳の生  
涯を閉じるまで須賀川の人々  
から「矢部先生、榎郎先生」と  
親しまれて呼ばれていた。



在りし日の矢部保太郎氏

榎郎は、作句の傍ら、古俳句  
の研究に没頭した。それは、  
多代女の五十年忌のとき、曾  
孫市原又次郎(俳号旧池・衆  
議院議員)が

虫鳴くや昔語るもわれ一人

の追悼句を詠んだのが、榎郎

を多代女の資料蒐集にかりた  
てた起因であったという。

蒐集にあたっては、全国の  
知人友人や奈良の天理図書館  
まで足を運んだ。その成果が  
「たよ女全集」「福島県俳人  
事典正統」となって刊行され  
た。

これらの功績が認められ、  
昭和三十三年十一月三日の文  
化の日に県文化功労賞が授与  
された。

榎郎の俳諧歴五十八年間の  
作句は実に六万七千八百句余、  
連句六十巻、主な記念碑、頌  
徳碑の揮毫二十五基、句碑八  
基がある。また、蒐集した資  
料は、市図書館と市立博物  
館に寄付された。

このように一生を俳諧一筋  
に生き抜いた保太郎は、昭和  
三十九年三月十日永眠した。  
八十三歳であった。

(永山祐三)

# 須賀川の人物史

⑩

## 太田総合病院の創立者

### 太田三郎

(一八六六～一九四九)



太田総合病院の創立者、太田三郎氏は、八幡町出身

たちから「木綿医者」との愛称があったという。

彼の医療にかける情熱と病院の発展につなげる目は院外にも向けられ、郡山町の学校医、会社・工場の嘱託医とし

て診療にあたる一方、政界、財界にも進出し、昭和五年に福島県議会議長、七年に郡山商工会議所会頭、十年には日本医師会代議員会議長などの要職にあった。

廣告、生儀裏に福島病院、医科大学醫院、日本赤十字社病院等に勤務の處今般帰郷の上左の場所に醫院を開設し、普く患者の治療に従事す  
安積郡郡山市中町三十八番地 郡役所前  
明治二十八年 太田三郎

これは、一生を地域医療のために貢献した、太田総合病院の創立者、太田三郎の開業広告である。  
三郎は、慶応二年十月二十一日、須賀川町字西五丁目五十七番地（八幡町）太田虎三の長男として生まれた。

しかし、この陰には、彼の最大の協力者佐賀夫人（大正十三年没）がいたことを忘れてはならないといわれている。  
明治、大正、昭和の三代にわたり郡山地方と福島県内の

太田家の先祖は須賀川城主二階堂家に仕えたが、落城後は町役人として高年寄、大庄屋の役職にあった。明治時代、父虎三は戸長（町長）を務めた。

三郎は、明治十七年、県立福島医学校（十四年須賀川から福島に移転）に入学。二十一年に最後の医学生として卒業した。その後、福島病院、福島監獄医などを経て、二十六年に上京。医科大学国家医学講習科を修了後、佐賀夫人と結婚した。翌二十七年七月七日、日清戦争の勃発により日本赤十字社救護員として広島

医療に貢献した三郎は昭和二十四年十二月十一日、郡山市池ノ台百十七番地の自宅で永眠した。八十三歳であった。  
太田病院は、昭和二十六年財団法人太田総合病院と改組、

予備病院勤務を命ぜられたが、二十八年五月五日、戦争が終結し、七月に帰還した。

彼は、念願の医院を長姉の嫁ぎ先、郡山町今泉久三郎（郡山町長）の持ち家（現太田総合病院本館）を借りて開院した。当時の郡山は人口一百万三十八人と県内で一番の発展地域であった。しかし、本格的な医療施設がなかったため、診療は患者の求めに応じて内科、外科、耳鼻咽喉科、眼科、婦人科など幅広く行った。庶民の医師を標榜し、休診日はなく往診も断らないことを信条にしていたことから、患者

理事長に院長の太田辰雄（五十八年没）が就任した。現在は、太田緑子理事長（辰雄夫人で三郎の七女）が運営にあたっている。

（永山祐三）